

## 3歳児をもつ母親の子育てに関する意識調査

### —看護の視点から育児支援を考える—

中添和代\*, 白石裕子, 舟越和代

香川県立医療短期大学看護学科

## How does Mother Conceptualize Parenting of Her 3-Year-Old Child?

### —The aspects of nursing related to the supports of child care—

Kazuyo Nakazoe\*, Yuko Shiraishi, and Kazuyo Funakoshi

*Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

#### Abstract

Takashiba's questionnaire was delivered to 165 mothers having a 3-year-old child and 138 answers were obtained. Investigation was focused on conceptualized parenting of the real mother, especially its correlation to abusive tendency and to support or protection by environment. Statistical analysis with Spearman's rank correlation coefficient revealed that the score of abusive tendency had significant inverse correlation ( $p < 0.05$ ) to the score of support or protection by environment and significant positive correlation ( $p < 0.01$ ) to the score of unawareness of parenting.

It was also suggested that a group of mothers with higher abusive tendency had more apparent difficulties in caring for their children adequately, having an anxiety that burdens of nurturance might cause isolation and loss of activities in their social life. And there was an interesting fact that most of those mothers had problems of conjugal relation to her husband in a sense.

**Key Words :** 虐待傾向 (abusive tendency), 実母 (real mother), 母親へのサポート (support by environment), 母親役割意識 (unawareness of mother's role)

\*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

\*Corresponding address: Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

## はじめに

親や養育者による子ども虐待が深刻な社会問題の一つになっている<sup>1)</sup>。看護職としての児童虐待への関わりは、医療機関における場合がほとんどである。そこでは、被虐待児の治療が最優先とされる。しかし、虐待に至るまでの要因や背景を理解することなしには、退院後の母子への十分な指導ができない。地域看護活動では、保健婦が虐待事例の母子と関わることもあるが、親権問題があり、母親との相談なく介入することは難しいのが現状である。

全国の児童相談所における虐待相談処理件数は、平成10年度は6,932件で、平成4年度に比べ6年間に約6倍に急増している。K県の統計によると養育者による主たる虐待者の約6割が実母である<sup>2)</sup>。子どもの虐待は、家庭という密室で発生し、潜在化する危険性がある。表面化しない虐待例を考慮にいと、統計に表れた数値より多いことが予測される。

本調査の目的は、母親が子ども虐待に至る要因を知ることである。そこで、3歳児を持つ一般の母親を対象にして、高芝ら<sup>3)</sup>の「母親のサポートおよび母親役割意識に関する質問紙」から、信頼性、妥当性が検証された35の質問項目を用いた調査を行った。

## 調査方法

### 1. 対象

K県M町とU町が行う3歳児健康診査対象の子どもを持つ母親165名中、調査表を回収できた138名（有効回答率83.6%）を対象とした。

### 2. 調査期間

調査期間は1999年7月から2000年1月である。

### 3. 質問紙の構成

質問紙は以下の3部で構成されている。

- 1) 対象者（母親）の年齢、夫の年齢、家族構成、子どもの数、夫の帰宅時間、就労の有無等対象者の属性。
- 2) 虐待傾向尺度（8つの質問項目）、サポート尺度（8つの質問項目）、母親役割肯定意識尺度（9つの質問項目）、母親役割否定意識尺度（7つの質問項目）およびその他（3つの質問項目）の計35の質問項目（表1）。

調査のバイアス（偏り）を避ける目的で4つの尺度の質問項目をランダムに並べた。

表1 4つの尺度の質問項目

尺度	項目番号	内 容
虐待傾向	2	必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう
	7	子どもが泣いて呼んでも、気分によっては無視してしまう
	9	子どもが泣くと、私の方が泣きなくなったりヒステリックになったりして、子どもにあたってしまう
	15	なかなか寝ないことや夜泣きに我慢できず、布団に押し付けたりして寝かせようとする
	18	子どもを叩きつづけて、ハット我にかえる
	26	罰としてミルクや食事を与えないことがある
	28	子どもだけ置いて一晩家を空けることがある
	33	罰として一室に長時間閉じ込めることがある
サポート	3	妊娠したとき夫は喜んでくれた
	4	友人は私の支えになってくれる
	11	家族（夫以外の）協力がある
	27	子育ての悩みを心から相談できる人がいる
	29	夫の協力がある
	32	夫との関係がうまくいっていない（逆転項目）
	34	近所の人が本当によく力になってくれる
	35	一人で育児をしているという不安がない
母親役割肯定意識	1	母親であることに充実感を感じる
	8	わたしにとって子どもが何より大切だ
	12	妊娠したとき嬉しかった
	14	子どものおかげで私は成長している
	16	母親であることに生きがいを感じている
	20	私は子どもと楽しい時間をよく過ごす
	21	子どもの将来をととても楽しみにしている
	24	母親である自分が好きだ
	31	母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた
母親役割否定意識	6	子どもを育てることが負担に感じられる
	13	本当は子どもをかわいく思えない
	17	自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる
	19	育児に携わっている間に世の中から取り残されていくように思う
	22	育児以外のことにしか興味がもてない
	25	母親であるために行動が制限されている
	30	子どもを産まない方が良かった
その他	5	現在の経済状態で満足だ
	10	私の母親の子育てを見習いたいと思う
	23	私は親に叩いてしつけられた

注：項目番号はバイアス（偏り）を避ける為ランダムに配置した質問順位を示す

## 3) 自由記述

- a. いらいらしたり狼狽すること
- b. ストレス解消法
- c. 誰に, どのように, 力になってほしいか
- d. その他, 子育てをするにあたっての要望

## 4. 調査手順

3歳児健康診査対象者の母親に質問紙を郵送し, 回答は無記名として3歳児健康診査時に回収した。

1) 35の質問項目は, 「その通り」(1点), 「どちらかといえばそうだ」(2点), 「どちらでもない」(3点), 「どちらかといえばちがう」(4点), 「ちがう」(5点)の5段階で, 回答結果を数値で得点化した。

2) 虐待傾向, サポート, 母親役割肯定意識, 母親役割否定意識の各得点の相関をスピアマン順位相関係数(Spearman's rank correlation coefficient)で求めた。

3) 対象者全員(n=138)の虐待傾向尺度の8つの質問項目の総得点を, 四分位法で, 高得点群(虐待傾向の低い群:n=29)と低得点群(虐待傾向の高い群:n=30)に分けた。サポート尺度(8項目), 母親役割肯定意識尺度(9項目)および母親役割否定意識尺度(7項目)で「その通り」, 「どちらかといえばそうである」と回答した群と「ちがう」, 「どちらかといえばちがう」と回答した群に分け, 虐待傾向の高い群と低い群との差異を $\chi^2$ 検定で求めた。

4) 自由記述については, 各質問ごとに, 共通する内容を整理分類した。

統計処理には統計ソフトのSPSS for windows 9.0を使用した。

## 結果

## 1. 対象(母親)の属性(表2)

対象の年齢は25~39歳で92.0%(127人), 夫の年齢は25~39歳で81.9%(113人)であった。核家族が74.6%(103人), 子どもの数は2人が62.3%(86人), 就労者が42.8%(59人)であった。20時までに帰宅する夫は, 54.3%(75人)であった。

## 2. 虐待傾向尺度8項目の回答結果(図1)

虐待傾向を示す回答は, 質問項目「2. 必要以上に, つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう」で「その通り」, 「どちらかといえばそうだ」の回答が64.5%(89人), 「9. 子どもが泣くと, 私の方が泣きたくなったりヒステリックになったりして子どもにあたっ

表2 対象の属性

n=138

属性	カテゴリー	人	%
年齢	20~24歳	8	5.8
	25~29歳	33	23.9
	30~34歳	73	52.9
	35~39歳	21	15.2
	40歳以上	2	1.4
	無回答	1	0.7
夫の年齢	20~24歳	5	3.6
	25~29歳	21	15.2
	30~34歳	60	43.5
	35~39歳	32	23.2
	40歳以上	18	13.0
	無回答	2	1.4
子ども数	1人	27	19.6
	2人	86	62.3
	3人以上	25	18.1
家族構成	核家族	103	74.6
	複合家族	33	23.9
	母子	2	1.4
就労	有	59	42.8
	無	79	57.2
夫の帰宅時間	18時までに帰宅	30	21.7
	20時までに帰宅	45	32.6
	22時までに帰宅	32	23.2
	その他(不規則・単身赴任など)	24	17.4
	無回答	7	5.1

てしまう」では52.2%(72人), 「7. 子どもが泣いて呼んでも, 気分によっては無視してしまう」では36.2%(50人), 「18. 子どもを叩き続けてハット我にかえる」では11.6%(16人), 「26. 罰としてミルクや食事を与えないことがある」と「33. 罰として一室に長時間閉じ込めることがある」では1.4%(2人)であった。

## 3. サポート尺度8項目の回答結果(図2)

サポートについて肯定的な回答(「その通り」, 「どちらかといえばそうだ」)は, 質問項目「3. 妊娠した時夫は喜んでくれた」で91.3%(126人), 「27. 子育ての悩みを心から相談できる人がいる」では78.3%(108人), 「4. 友人は私の支えになってくれる」では77.5%(107人), 「29. 夫の協力がある」が71.7%(99人), 「11. 家族(夫以外の)協力がある」では68.8%(95人), 「35. 一人で育児をしているという不安がない」では60.9%(84人)であった。サポートについて否定的な回答は, 質問項目「32. 夫との関係がうまくいっていない」では「その通り」, 「どちらかといえばそうだ」の回答が22.4%(31人), 「34. 近所の人が本当によく力になってくれる」で

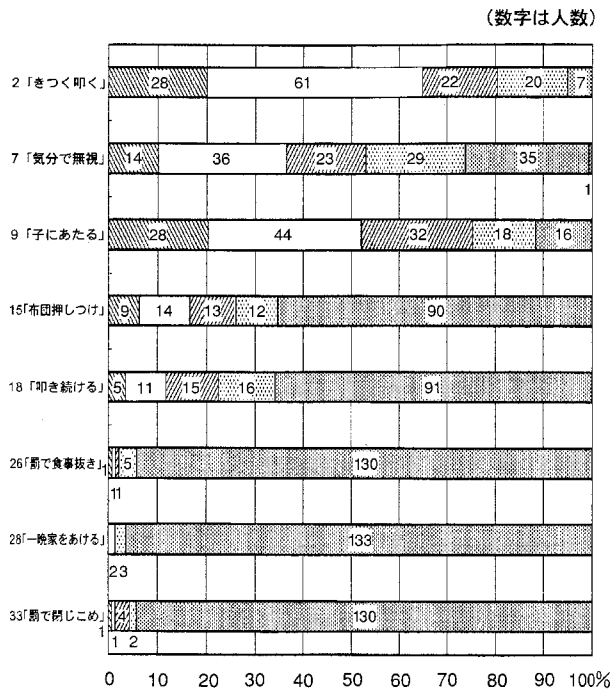


図1 虐待傾向尺度8項目の回答結果  
n=138

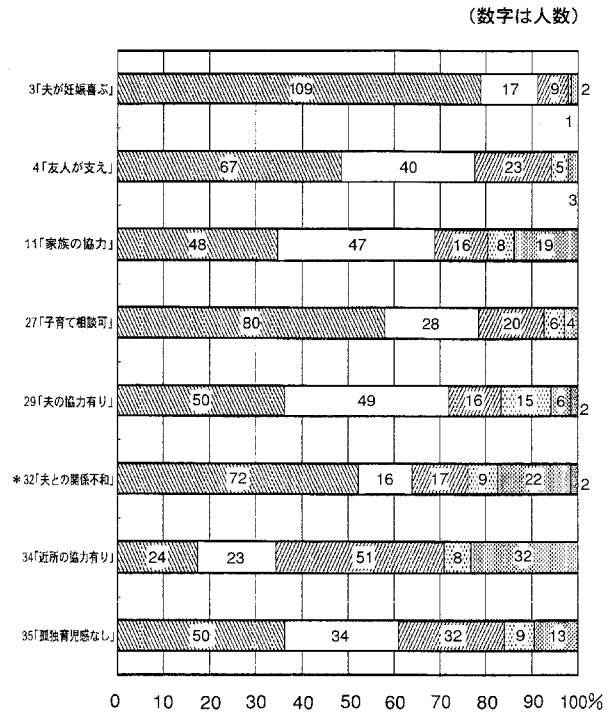


図2 サポート尺度8項目の回答結果  
n=138 \*逆転項目

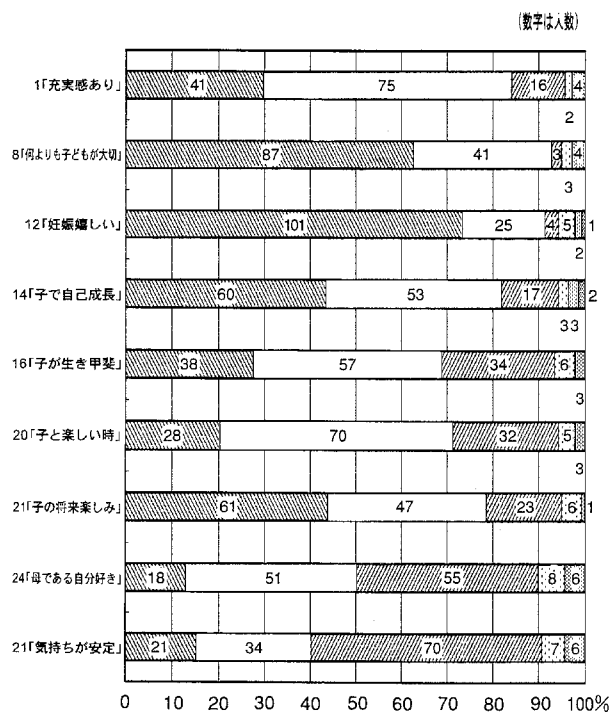


図3 母親役割肯定意識尺度9項目の回答結果  
n=138

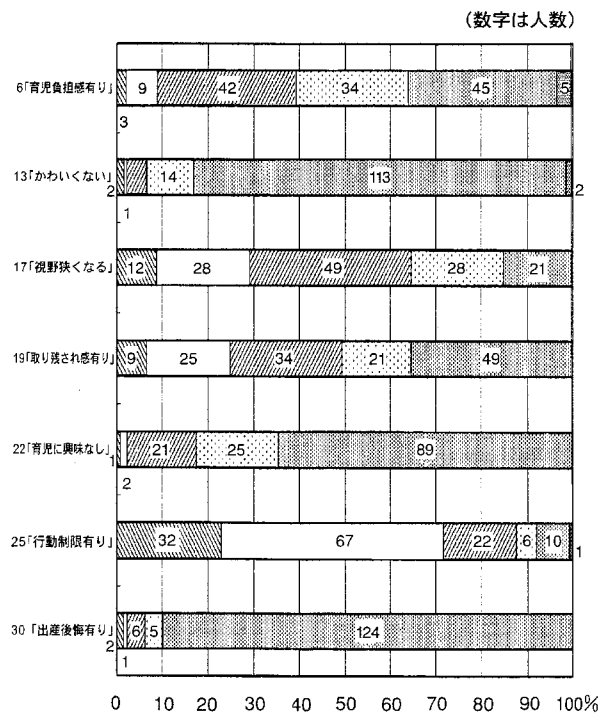


図4 母親役割否定意識尺度7項目の回答結果  
n=138

□1(その通り) □2(どちらかといえばそうだ) ■3(どちらでもない) □4(どちらかといえばちがう) □5(ちがう) ■無回答

表3 質問項目34「近所の人が本当に良く力になってくれる」と属性の関連

n=138

属性と分類 (人)			回答	その通り・どちらか といえそう (人)	どちらでもない (人)	ちがう・どちらか といえちがう (人)	
家族構成	核家族	103		41	38	24	*
	複合家族	33		5	13	15	
	母子家庭	2		1	0	1	
就労	有	59		13	21	25	*
	無	79		34	30	15	

 $\chi^2$ 検定, \*  $p<0.05$ 

表4 4つの尺度間の相関

尺度名	虐待傾向	サポート	母親役割 肯定意識	母親役割 否定意識
虐待傾向	...			
サポート	-0.183*	...		
母親役割肯定意識	-0.160	0.304**	...	
母親役割否定意識	0.333**	-0.356**	-0.236**	...

Spearman's rank correlation coefficient. \* $p<0.05$  \*\* $p<0.01$ 

は「ちがう」、「どちらかといえちがう」の回答が28.9% (40人) であった。

#### 4. 母親役割肯定意識尺度9項目の回答結果 (図3)

母親役割肯定意識は、質問9項目で「ちがう」、「どちらかといえちがう」の否定的な回答が4% (6人) ~10.1% (14人) であった。一方、肯定的な回答(「その通り」、「どちらかといえそうだ」)の比率が低かった質問項目は、「24. 母親である自分が好きだ」で50.0% (69人), 「31. 母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた」では39.9% (55人) であった。

#### 5. 母親役割否定意識尺度7項目の回答結果 (図4)

母親役割否定意識では、「その通り」、「どちらかといえそうだ」の回答の比率が高かった質問項目は、「25. 母親であるために行動が制限されている」で71.7% (99人) であり、次いで「17. 自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなる」では29.0% (40人), 「19. 育児に携わっている間に世の中から取り残されていくように思う」では24.6% (34人) であった。一方、「ちがう」「どちらかといえちがう」の回答の比率が高かった質問項目は、「30. 子どもを生まない方が良かった」で93.5% (129人) であり、次いで「13. 本当は子どもをかわいく思えない」では92.0% (127人), 「22. 育児以外のことにしか興味が持てない」では82.6% (114人) であった。

6. 対象の属性と4つの尺度の各質問項目との関連  
対象の属性と4つの尺度(虐待傾向, サポート, 母親役割肯定意識, 母親役割否定意識)の各質問項目との関連は、質問項目の「34. 近所の人が本当によく力になってくれる」で、核家族と複合家族間では前者が、就労者と非就労者間では後者が、「その通り」、「どちらかといえそうだ」の回答が有意に多かった( $\chi^2$ 検定,  $p<0.05$ )。(表3)

#### 7. 4つの尺度間の相関(表4)

虐待傾向得点は、サポート得点と負の相関(スピアマン順位相関係数,  $-0.183, p<0.05$ ), 母親役割否定意識得点と正の相関(スピアマン順位相関係数,  $0.333, p<0.01$ ) がみられた。

#### 8. 虐待傾向と母親役割否定意識尺度の各項目との関連(表5)

虐待傾向の高い群と低い群間で、「6. 子どもを育てることが負担に感じられる」、「17. 自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなる」、「19. 育児に携わっている間に世の中から取り残されていくように思う」の3つの質問項目で、前者に「その通り」、「どちらかといえそうだ」の回答が有意に多かった( $\chi^2$ 検定,  $p<0.05$ )。

#### 9. 虐待傾向とサポート尺度の各質問項目の関連(表6)

虐待傾向の高い群と低い群間の比較で、前者は「32. 夫との関係がうまくいっていない」の質問項目で、「その通り」、「どちらかといえそうだ」の回答が多く、また「35. 一人で育児をしているという不安がない」の質問項目で、「ちがう」、「どちらかといえちがう」の回答が有意に多かった( $\chi^2$ 検定,  $p<0.05$ )。

#### 10. 自由記述(重複回答)

##### a. 「いらいらしたり狼狽すること」

母親がいらいらしたり狼狽することでは、回答のあった157人(延人数)のうち、子どもに関することが93人と多く、その中でも、「子どもが思

表5 虐待傾向と母親役割否定意識尺度の各項目との関連

虐待傾向の高い群 (n=29)

虐待傾向の低い群 (n=30)

項目番号	質問内容	虐待傾向 (人)	その通り・どちら かといえばそう (人)	どちらでもない (人)	ちがう・どちらか といえばちがう (人)
6	子どもを育てることが負担に感じられる	高い群	27	4	15
		低い群	30	3	5
13	本当は子どもをかわいく思えない	高い群	29	2	2
		低い群	29	1	1
17	自分の関心が子どもばかりにむいて視野が狭くなる	高い群	29	13	12
		低い群	30	5	12
19	育児に携わっている間に世の中から取り残されていくように思う	高い群	29	15	6
		低い群	30	6	4
22	育児以外のことにしか興味がもてない	高い群	29	1	6
		低い群	30	0	4
25	母親であるために行動が制限されている	高い群	29	23	3
		低い群	30	19	7
30	子どもを産まない方が良かった	高い群	29	2	4
		低い群	30	0	1

 $\chi^2$ 検定, \* p<0.05

表6 虐待傾向とサポート尺度の各項目との関連

虐待傾向の高い群 (n=29)

虐待傾向の低い群 (n=30)

項目番号	質問内容	虐待傾向 (人)	その通り・どちら かといえばそう (人)	どちらでもない (人)	ちがう・どちらか といえばちがう (人)
3	妊娠したとき夫は喜んでくれた	高い群	29	24	4
		低い群	30	29	0
4	友人は私の支えになってくれる	高い群	29	21	5
		低い群	30	27	1
11	家族（夫以外の）協力がある	高い群	29	19	4
		低い群	30	21	4
27	子育ての悩みを心から相談できる人がある	高い群	29	19	7
		低い群	30	25	3
29	夫の協力がある	高い群	29	16	7
		低い群	△28	21	2
32	夫との関係がうまくいっていない	高い群	29	9	6
		低い群	△28	3	2
34	近所の人が本当によく力になってくれる	高い群	29	10	12
		低い群	30	11	11
35	一人で育児をしているという不安がない	高い群	29	11	7
		低い群	30	23	4

△母子家庭2名を除く

 $\chi^2$ 検定, \* p<0.05

うようにならない」の回答が最も多く26人いた。

## b. 「ストレス解消法」

ストレス解消法では、回答のあった114人（延人数）のうち、「友人と話す」、「自分の好きなことをする」の回答がそれぞれ16人と多く、「夫と話す」の回答が7人、「夫と遊びに行く」の回答が3人であった。

## c. 「誰に、どのように、力になってほしいか」

回答のあった74人（延人数）のうち、「誰に」では、「夫に」が46人で最も多く、次いで、「親及び身内」が14人であった。夫には、「子どもと一緒に遊んでほしい」という回答が13人、「育児に協力してほしい」という回答が7人、「早く帰ってほしい」、「子どもや家事の悩みを聞いて」とい

う回答がそれぞれ5人であった。「育児の大変さを理解して」、「私に優しくかまって」という回答もあった。

d. 「その他、子育てするにあたっての要望」

その他、子育てするにあたっての要望では、回答のあった106人（延人数）のうち育児に関する施策や制度等行政に関するものが79人と最も多かった。具体的には、「乳幼児医療費の無料化の延長をしてほしい」という回答が17人で、「公園を増やしてほしい」、「公園の修復整備をしてほしい」がそれぞれ7人であった。その他「保育料金、保育時間、保育所の入所条件の改善」を求める回答等があった。

## 考察

虐待傾向の行動として母親の半数以上に見られたものは、「2.必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう」と「9.子どもが泣くと、私の方が泣きなくなったり、ヒステリックになったりして子どもにあたってしまう」であった。服部ら<sup>4)</sup>は「子どもをしかる時、打つとか、つねるとか、しぼる」などの体罰は、10カ月児健診（32%）、1歳半児健診（58%）、3歳児半健診（67%）と児の年齢の上昇に伴い高率化することを示している。本調査でも、「必要以上に、つい子どもにきつく言ったり叩いてしまう」で「その通り」、「どちらかといえばそうだ」の回答が64.5%であり、高芝らの1歳6ヶ月児の母親を対象にした調査<sup>3)</sup>の55.9%に比べ、約9%高率であった。これは3歳頃から第1反抗期である自我の発達が始まり、母親がそれに対して苛立ちを覚えることと関連があると考えられる。

母親役割否定意識と虐待傾向は正の相関が見られ、育児負担感、社会的な視野が狭くなること、取り残され感、を感じている母親に虐待傾向が高かった。現代社会において、未婚率や初婚年齢の上昇にみられるように、女性が自分の生活を楽しみたい、育児や家事にしばられたくない、育児によりキャリアが中断することが不安であるなど、女性の結婚観やライフスタイルの変化と関連があると考えられる。

虐待傾向の高い群の母親の特徴として、夫との関係がうまくいっていないと感じていたり、一人で育児をしているという不安感があった。西澤<sup>5)</sup>は、Oates (1982) が行ったロイヤル・アレキサンドラこども病院において母親からの回顧的な情報による

虐待群と虐待群と同期間に同病院で出産、発達初期に面接調査を行ったコントロール群を比較した研究データを検討し、虐待群の母親には、家族内外の援助をあまり受けることなく子育てを行う傾向が見られたと述べている。子育て中の母親にとって、夫のサポートが子育ての不安やストレスを軽減させ、ひいては虐待に至る行動を抑止することにつながると考えられる。

「誰に、どのように、力になってほしいか」の質問には、「夫に」と答えた母親が多く、精神的サポートを求める回答が多かった。1999年に厚生省は、「育児をしない男を父とは呼ばない」というスローガンを掲げ、育児への参加が少ない男性の責任意識や子育てへの参加の必要性を訴えた<sup>1)</sup>。母親にとって子育てがストレスと感じられる時、妻に向き合い共に子育てをしていくという夫の支えがあることが、子ども虐待抑止への重要な要因であることが示唆された。

## 結論

高芝らの子育てに関する質問紙を3歳児を持つ165名の母親に配布し、138名の回答が得られた。本調査は、実母による子育てに関する意識、特に、虐待傾向と周囲のサポートとの関連に焦点を当てた。虐待傾向の得点との関連をスピアマン順位相関係数で求めた。虐待傾向とサポートは負の相関 ( $p < 0.01$ )、虐待傾向と母親役割否定意識は正の相関 ( $p < 0.01$ ) がみられた。虐待傾向が高い群の母親は育児の負担感、社会的視野が狭くなること、世の中から取り残されること、を感じていることが示唆された。また、虐待傾向が高い群の母親は虐待傾向の低い群の母親より夫との関係がうまくいっておらず、一人で育児をしているという不安感を持っていることが明らかになった。

## 謝辞

本調査に快く承諾し、協力して下さったお母さま方、ならびにM町、U町の保健婦の方々に心から感謝致します。また、統計処理においてご助言をいただきました香川医科大学北窓隆子先生、論文作成にあたりご高閲賜りました当短期大学看護学科教授松本圭蔵先生に深く感謝致します。

## 文献

- 1) 厚生省 (1999) 厚生白書 (平成11年版) 社会保障と国民生活, 東京 p. 247, 252.
- 2) 香川県 (1999) 関係者のための子ども虐待防止の手引き, 香川県児童相談所, 香川 p. 50-52.
- 3) 高芝朋子, 山下一夫 (1998) 1歳6ヶ月健診からみる子ども虐待傾向-母親のサポート及び母親役割意識に関する質問紙調査を通して-, 第17回日本心理臨床学会名古屋大会収録集 (名古屋), p. 420-421.
- 4) 服部祥子, 原田正文 (1991) “乳幼児の心身発達と環境”, 名古屋大学出版会, 名古屋, p. 229.
- 5) 西澤哲 (1998) “子どもの虐待-子どもと家族への治療的アプローチ”, 誠信書房, 東京, p. 61-64.

---

受付日 2000年3月21日